

Title	<大會抄録>宋代における兩税の折納について
Author(s)	島居, 一康
Citation	東洋史研究 (1980), 39(3): 605-605
Issue Date	1980-12-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/153791">http://dx.doi.org/10.14989/153791</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

ペーンであった。

このような中國にとつての未曾有の體驗——超大國になるという目標設定、そのための高度成長のための諸方策が可能であるという信念を支えた歴史像こそ毛澤東主義による官許の「正史」であった。

### 宋代における兩税の折納について

島居 一康

八世紀末に創始された兩税法は、幾つかの劃期的な原則から成り立っていた。その一つに所謂「錢數・錢納」原則があるが、この原則のもとでも、當初より絹帛・穀物による「折納」が存在していた。船越泰次氏の考察によれば、兩税の課徴は田畝の税（＝斛斗・青苗錢）と兩税錢とにより、これを夏秋の二税として徴科したものであり、「折納」は専ら兩税錢の折納として徴取される布帛であった（『東洋史研究』三十一—四）。

九世紀にはいると、兩税錢納入額中に占める折納部分の比率は次第に増加してゆき、やがて「分數定額制」とでも稱すべき方式が確立するに至った。しかしこの方式は、その後五代になると、華北諸朝と四川・江南諸國とではやや異った展開をとげたため、宋朝の統一後、兩税の折納方式が整備されたのは、十一世紀初め頃であったと思われる。

本報告では、五代・宋初における兩税折納の展開過程を跡づけ、北宋期における折納の實態を分析する。唐代に兩税錢の折納とされ

ていた布帛納入が、宋代に夏税本色として定着した事實、また他方、宋代兩税において、附加税等を除き、銅錢による納入が率ね臨時的・補助的・便宜的な措置とされた事實等は、貨幣經濟と税制とを媒介する手段としての「折納」制の検討によって、その意義が明らかにされるであらう。

### 「吹律定姓」について

——中國古代姓氏制に關する一問題——

尾形 勇

「吹律定姓」とは、律管を吹くことで五音（宮商角徵羽）を精察し、その五音に見合った姓を定める——という、些か玄妖なる技法を言う。この方術の成立の背景には、戰國期における陰陽五行説、またより直接的には、「吹律」して「八風」を調べ戰術を定めるといふ兵家の方略、さらに産聲（うぶごゑ）の音程を「吹律」を以て確認し、よつて名を定めるといふ樂家系統の儀式などがあつたらしいが、ともあれ、聖人・黃帝そして孔子の所爲として、概ね「緯書」の類において、この「吹律定姓」の記事は認められる。

いっぽう後漢の時代より、各姓の發音發聲の狀態から五音を判定して吉凶を占う、もっぱら「野人・巫師」による所謂「五姓法」が流行し、音韻學の發達と表裏しつつ、後代に受け繼がれてゆく。このばあい、各姓がどの音に相當されていたかについては、史書にては僅かの具體例を見出すのみであつたが、宋・謝維新の『古今合璧